

## 部会活動報告

### ジェンダー部会

今年度は、5月19日(土)、9月22日(土)の2回、研究会を開催した。いずれも東京・麹町の民主教育研究所会議室にて、10月の第30回研究大会に向けての準備として開催された。参加者は4名、6名と少なかったが、報告者の問題提起に率直な意見交換がなされたほか、部員の持つ悩みや部会の今後の方向、新たな企画なども提案され、部会の今後の道を開く会となった。

10月20-21日に立命館大学衣笠キャンパスで開催された第30回大会研究大会は、今年度の部会のメインの取り組みであった。大会前日の10月19日に、キャンパスプラザ京都で開催された30周年記念のパネルディスカッション「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」では、<唯物論とフェミニズムの対話>がテーマのひとつとなり、部員の浅野がパネラーとして報告した。20日のシンポジウム「平和の構想—ナショナリズムとグローバリズムと暴力を問う」では、ピープルズプラン研究所の武藤一羊氏が戦争は性暴力を構造的に持つことを指摘され、ジェンダーの視点から今日の戦争を考察することの重要性が浮き彫りにされた。翌21日の第2分科会では、この武藤氏の指摘も前提にして、藤谷部員の司会の下に、岩谷部員と浅野が報告した。参加者は15名と、それほど多くはなかったが、新たに2名の部員を迎えることができた。研究大会そのものも、部員の健闘もあり、唯研でもジェンダーがメインストリームのひとつとして定着しつつあることが感じさせられた印象深い大会となった。

現在部員は17名となり、着実に増えている。若い部員からは、研究者として自立するプロセスで遭遇する諸問題の共有とネットワーク形成の要望がだされ、今後は若手を中心となって公開研究会を組織し、唯研の会員に広く協力を呼び掛ける形での活動を展開することが提案された。

また、現在、高校生向けの企画本の出版に部会として取り組むことが話し合われている。

ジェンダー部会は老若男女とりまぜて本音が語り合える、とりわけ若手が元気な、今が旬の(発展途上にある)部会である。随時会員募集中。

(文責：浅野富美枝)

### マルクス部会

前年(2006年)に引き続き、『ドイツ・イデオロギー』(以下『ド・イデ』)編集問題を取り上げた。現在、新メガ第1篇第5巻(『ド・イデ』)の編集は、冊子版とCD版とに分けて行われている。冊子版編集はドイツ人研究者によって、CD版編集は日本人研究者の手で進められることになり、日本では、2007年8月にCD版編集の基本方針が確認されて作業に入ったところである。

CD版は、マルクス/エンゲルスの草稿について、基底稿と最終稿との間の改稿過程を3段階ほどに分けて再現する予定であり、これによって読者がマルクス/エンゲルスの改稿過程を追思考できるようになる。今回の部会は、『ド・イデ』CD版編集委員の平子友長会員と渡辺憲正会員が、それぞれ担当の一頁の復元作業を日本ではじめて紹介するものであった。(文責：渡辺憲正)

### 環境思想部会

環境思想部会は、2004年10月に開催された唯物論研究協会第27回大会(関東学院大学)にて発足しました。20世紀後半以降、環境やエコロジーをめぐる本格的な哲学思想は、関係する教育学、社会学、政治学、経済学など種々の分野の思想的営みとともに、今日、「環境思想」という学際的な性格の学問を成立させつつあるといえる。この流れのなかで、主にマルクス思想や唯物論の視点から或いは現代批判の思想的観点からどうい

ができるか、どういう新たな枠組みを提起できるか、それらを探究する場として設定されている。当部会はこれまで5回にわたって15名から20名近くの参加を得て研究会や講演会を開催してきた。また、多数の会員の協力で『環境思想キーワード』（青木書店、2005年）を発刊し、また、その韓国語訳が2007年に発刊された。（世話人：尾関周二、武田一博、亀山純生、澤 佳成）

### 環境思想部会～これまでの軌跡～

- 【第1回】2004年10月23日 関東学院大学  
部会の立ち上げについて（報告：尾関周二）  
『環境思想キーワード』の編集状況について（報告：武田一博）
- 【第2回】2005年8月2日 東京農工大学  
講演：小池直人
- 【第3回】2005年10月22日 秋田経法大学  
熊坂元大：共通善としての環境保護——弁証法的自然主義を共同体主義の視点から捉える  
澤 佳成（東京農工大学大学院）：自然の権利と人間の責任
- 【第4回】2006年10月21日 静岡大学  
水野邦彦：居住の思想に向けて  
片山善博：共生社会へむけて——承認論の視点から  
穴見慎一：人間における〈自然(ナチュラル)さ〉の探求——ノーガードの「共進化」概念を手がかりに——
- 【第5回】2007年10月20日 立命館大学  
市原あかね：バイオマスエネルギー政策の階級・階層性  
吉田哲郎：エコロジズムとジェンダーとの関係性

## 若手会員研究会

唯研若手会員研究会（以下「若手研」と略）は、ジェンダーや環境思想、マルクスなど他の研究部会とはやや性格を異にしている。すでにその名称

からも明らかなおと、若手研の最大のメルクマールはその大まかな年齢構成にあり、他の部会のように特定のテーマについて回を重ねつつ議論を掘り下げていく、というスタイルを必ずしもとっていない。したがって、研究会自体はすでに6年以上の活動歴を有しているものの、その活動全体について概略を述べるのは決して容易ではない。

それでも、あえて筆者個人の気づいた点を中心に簡単に述べるとするならば、そこには唯研で蓄積された問題関心や議論に対する継承と革新の両面を見て取ることができるし、またそれゆえに特有の課題に直面しているように思われる。以下、できれば後半の活動記録とあわせてお読みいただければ幸いである。

さて、まずは継承の側面から見ていこう。例えばマルクスとマルクス主義、あるいはフランクフルト学派や社会科学の古典に関するオーソドックスな研究スタイルが引き継がれ、議論を深めていることについては改めて述べるまでもない。特にマルクスとフランクフルト学派に対して、若手研究者世代は世上しばしば吹聴されるよりもはるかに強い関心を抱き続けているように思われる。

もちろん、若手研の参加者たちはさまざまな形で唯研に、あるいは唯研会員の議論に関心を持っているからこそ若手研に参加しているのだから、マルクスや、マルクスに影響を受けた批判的な諸思想に関心が根強いのは当然かもしれない。しかし、活動記録に見られるように、そうした若手研究者は決して少数ではない。このことは、現代社会に対して批判的に取り組もうとするならば、マルクスおよびマルクス主義が（多くの批判や留保は残しつつも）若手研究者にとってもなお極めて魅力的な思想であり続けていることを示しているだろう。

さらに、唯研の中で近年盛んに議論されているテーマが若手研での議論に引き継がれていることも見て取れるだろう。特にエコロジーないし環境思想、フェミニズム、あるいは教育と青少年の状況、またサブカルチャーなど新たな文化表象をめぐる問題は、すでに唯研においてより年長の会員

が問題を提起し、さまざまな形で議論を重ねてきたテーマであるが、若手研の議論ではそれぞれ中心的なテーマの一つと言えるほどの比重を占めている。

とはいえ、もちろん若手研での議論は先行世代の単なるコピーないしエピソードではあり得ない。むしろ、先行世代の唯研会員が「新たな課題」として見出したこれらの問題は、若手研究者たちにとって他ならぬ「我が事」として引き受けるべき課題だったのではないだろうか。事実、若手研参加者の大半は、猫の目入試に象徴される教育政策の動揺にさらされながら、各種サブカルチャーを生活の一部として自然に受容しつつ、エコロジーやフェミニズムの発展と同時代的に成長してきたのである。そこには否応なしにある種の同時代性ないし当事者性が影を落とすことになるし、だからこそ「新たな課題」は若手研究者たちによって強い関心と熱意をもって引き継がれたのだと言えよう。

だが、このある種の同時代性、当事者性は、ひるがえってこれまでの議論や観点、問題設定に対して一定の距離感を引き起こすことにもなるだろう。そして、先ほど挙げた若手研の「革新」と「課題」は、まさにこの点に関わる。

若手研に参加する若手研究者の大半にとっては、例えばマルクス主義の運動上の最盛期も、エコロジーやフェミニズムの思想的草創期における葛藤や苦悩も、同時代の「我が事」ではあり得ない。もちろん若手研究者たちがこれらの時代の議論の蓄積から学んだことは数多く、また多岐にわたるのだが、しかし当事者ならぬがゆえの距離感もまた否定しがたいように思われる。だからこそ若手研での議論はこれまでの「しがらみ」とらわれない自由な議論であり得るし、そこで咀嚼された先行世代の議論や問題設定は新たな意義を獲得することとなるのだが、同時に「これまでの蓄積」とどのように距離を取るのか、という課題も生ずるだろう。また、同時代性・当事者性をてこととしてこれまでの議論の蓄積をのりこえ、現代の状況に対する新たな展望を見出そうとするときには、

当事者なればこそ説得力ある展望を見出し難いという困難に直面することにもなるだろう。

多種多様な研究テーマを有する若手研の参加者たちが研究会の場で共通に議論し得るのは、現代社会に批判的に取り組む上で、おそらく以上のような関心と課題を共有しているからではないだろうか。考えてみれば、大まかな世代的共通性以外には問題関心も研究テーマも多種多様なこの研究会において、それでも毎回熱心な議論をたたかわすことができる、というのは不思議なことである。それが不思議ならず継続し得たのは、やはり個々のテーマや問題設定を超えて、あるいはその背後に、以上のような共通の関心と課題があったからではなかろうか。そして、先行世代の蓄積と、そこで提起された「新たな課題」を「我が事」として引き受け、格闘するという活動にとって、やはり研究会という場が小さからぬ役割を果たしているのだろう。

願わくば、今後ともこうした格闘の場として、少しずつでも歩みを進めて行ければと思う。(橋本直人・澤 佳成)

### これまでの活動記録

【第1回】2002年3月9日 一橋大学

明石英人：『ドイツ・イデオロギー』における意識の三層構造

三崎和志：ベンヤミンと1次大戦

【第2回】2002年8月3日 一橋大学

福永真弓：ソーシャルエコロジーの射程—「公正」と「正義」をめぐる

景井 充：デュルケム道徳社会学の中間総括と展望

【第3回】2002年10月26日 高崎経済大学

小屋敷琢己：沖縄写真の困難—写真家・東松照明の転換

【第4回】2003年3月15日

慶應義塾大学三田キャンパス

和田悠：ある小学校教師の28年間：岸本清明の教師経験に即して

出口剛司：E. フロム・モデル論の再構成：亡命と「はざまの思考」をめぐる

- 【第5回】2003年8月2日  
慶應義塾大学三田キャンパス  
三上 真理子：近代日本における兵役拒否・兵役忌避——国家権力からの逃走  
田上 孝一：ベジタリアニズムの倫理的根拠
- 【第6回】2003年11月15日 法政大学市ヶ谷校舎  
天島一郎：市民社会論におけるアドルノ言語哲学の意味—市民社会論的方法的前提としての概念論  
尾崎寛直：公害地域における環境再生と被害者のノーマライゼーション
- 【第7回】2004年3月13日  
法政大学市ヶ谷キャンパス  
岩谷良恵：PTSD（心的外傷）からの回復に関わる言語空間の意味と課題—性暴力被害者と戦争帰還兵が言葉を取り戻すとき  
永谷敏之：現代日本のナショナリズムに関する考察
- 【第8回】2004年7月31日  
法政大学市ヶ谷キャンパス  
上柿崇英：ハーバーマスの「未完のプロジェクト」とアンチ・グローバリズム運動  
鈴木宗徳：〈リスク社会学〉の政治学—ギデンズ再帰性理論のイデオロギー批判
- 【第9回】2005年3月12日  
法政大学市ヶ谷キャンパス  
大屋定晴：グローバリゼーションとイデオロギー／ヘゲモニー—最近のマルクス主義的議論の検討を通じて  
市井吉興：エリアス社会学とオランダ社会学界：オランダ・エリアス学派の軌跡を辿る
- 【第10回】2005年8月6,7日 六甲山 YMCA  
栗山究：『地域志向型博物館』の本質と当面する問題—ある社会教育実践者（1947-1991）の思想と行動を手がかりに  
藤田悟：マルクス市民社会論の今日的再構築に向けて  
片山善博：「差異と承認—現代の承認論の射程」
- 【第11回】2006年3月25,6日  
南山学園研修センター  
尾場瀬一郎：グラムシにおける哲学  
橋本直人：ウェーバー行為論の転回とその射程—『カテゴリー』と『基礎概念』の比較から
- 【第12回】2006年8月6,7日 早稲田奉仕園  
小澤浩明：ブルデューのネオ・リベラリズム批判と社会運動—トランスナショナルな社会国家の可能性  
小椋宗一郎：『妊娠葛藤』とは何か—妊娠中絶に関するドイツ法制度の成立  
吉田幸治：『はだしのゲン』を読み解く視点—マンガ・戦争・記憶
- 【第13回】2007年3月25日  
法政大学市ヶ谷キャンパス  
藤井吉祥：〈自由な学校〉における生徒の日常から浮かぶもの  
澤 佳成：〈ケアの倫理〉の視点からみた環境倫理の可能性
- 【第14回】2007年8月4日  
法政大学市ヶ谷キャンパス  
穴見慎一：人間における〈自然さ〉の探求—批判的实在論の可能性について—  
中嶋英理：現在の優生思想理解の問題点を考える—海野幸徳の人種改造論と社会事業学論をヒントに
- 【第15回】2008年3月22日  
法政大学市ヶ谷キャンパス  
佐々木 隆治：マルクスの〈唯物論的方法〉について  
高橋 在也：戦時下知識人家庭の家内雑誌—「家」と抵抗